

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い



伝説 藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い

紀行 アメノヒボコと伊和大神の足跡

- ・「伊和大神」の名前
- ・伊和大神とアメノヒボコ
- ・出石神社
- ・出石城
- ・御出石神社
- ・藤無山

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

藤無山

アメノヒボコと伊和大神の国争い

アメノヒボコは、とおいとおい昔、新羅（しらぎ）という国からわたって来ました。

日本に着いたアメノヒボコは、難波（なにわ=現在の大阪）に入ろうとしましたが、そこにいた神々が、どうしても許してくれません。そこでアメノヒボコは、住むところをさがして播磨国（はりまのくに）にやって来たのです。

播磨国へやって来たアメノヒボコは、住む場所をさがしましたが、そのころ播磨国にいた伊和大神（いわのおかみ）という神様は、とつぜん異国の人が出て来たものですから、「ここはわたしの国ですから、よそへ行ってください」と断りました。ところがアメノヒボコは、剣で海の水をかき回して大きなうずをつくり、そこへ船をならべて一夜を過ごし、立ち去る気配がありません。その勢いに、伊和大神はおどろきました。

「これはぐずぐずしていたら、国を取られてしまう。はやく土地をおさえてしまおう。」

大神は、大急ぎで川をさかのぼって行きました。そのとちゅう、ある丘の上で食事をしたのですが、あわてていたので、ごはん粒をたくさんこぼしてしまいました。そこで、その丘を粒丘（いいぼのおか）と呼ぶようになったのが、現在の揖保（いぼ）という地名のはじまりです。

一方のアメノヒボコも、大神と同じように川をさかのぼって行きました。二人は、現在の宍粟市（しろうし）あたりで山や谷を取り合ったので、このあたりの谷は、ずいぶん曲がってしまったそうです。さらに二人は福崎町（ふくさきちょう）のあたりでも、軍勢を出して戦ったといえます。

二人の争いは、なかなか勝負がつきませんでした。

「このままではまわりの者が困るだけだ。」

そこで二人は、こんなふうに話し合いました。

「高い山の上から三本ずつ黒葛（くろかずら）を投げて、落ちた場所をそれぞれがおさめる国にしようじゃないか。」

二人はさっそく、但馬国（たじまのくに）と播磨国の境にある藤無山（ふじなしやま）という山のとっぺんにのぼりました。そこでおたがいに、三本ずつ黒葛を取りました。それを足に乗せて飛ばすのです。

二人は、黒葛を足の上に乗せると、えいっとばかりに足をふりました。

「さて、黒葛はどこまで飛んだか。」と確かめてみると、

「おう、私のは三本とも出石（いずし）に落ちている。」とアメノヒボコがさげびました。

「わしの黒葛は、ひとつは城崎（きのさき）、ひとつは八鹿（ようか）に落ちているが、あとのひとつは・・・。」

伊和大神がさがしていると、「やあ、あんな所に落ちている。」とアメノヒボコが指さしました。

黒葛は反対側、播磨国の宍粟郡（しろうぐん）に落ちていたのです。アメノヒボコの黒葛がたくさん但馬に落ちていたので、アメノヒボコは但馬国を、伊和大神は播磨国をおさめることにして、二人は別れてゆきました。

ある本では、二人とも本当は藤のつるがほしかったのですが、一本も見つからなかったため、この山が藤無山と呼ばれるようになったと伝えられています。

その後アメノヒボコは但馬国で、伊和大神は播磨国で、それぞれに国造りをしました。アメノヒボコは、亡くなると神様として祭られました。それが現在の出石神社のはじまりだということです。

紀行「アメノヒボコと伊和大神の足跡」

「伊和大神」の名前

『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』の中には、伊和大神（いわのおおかみ）の記述がいくつかある。記述にはややばらつきがあって、「伊和大神」と記述される場合、「大汝命（おおなむちのみこと）」あるいは「葦原志許乎命（あしはらしこのおのみこと）」と記述される場合がある。また「大汝命」は、記紀では「大国主命（おおくにぬしのみこと）」と同じとされているので、同じ神が三つか四つの名で呼ばれていることになる。

この神様の名前についていくつかの説があるのは承知しているが、混乱を避けるため、『播磨国風土記』でほかの名前が用いられている場合でも、伝説紀行の中では「伊和大神」で統一しておきたい。



伊和神社(拝殿)

伊和大神とアメノヒボコ



伊和神社(拝殿)

『播磨国風土記』の讃容（佐用）郡（さよぐん）の項では、伊和大神は「贄用比賣命（さよひめのみこと）」との国占めに負けて立ち去っているから、大神自身、もともと播磨（はりま）にいた神ではなかったのかもしれない。普通は、『播磨国風土記』にも登場する、伊和君（いわのみみ）の一族が奉じた神であったとされている。

一方のアメノヒボコも、新羅（しらぎ）から渡来した人である。ここで取り上げる余裕がないのは残念だが、アメノヒボコ自身の出自についても、『古事記（こじき）』には不思議な話が伝わっている。つまり播磨にとっては、どちらも外来の人（神）であったということだろう。

風土記の記述からは、伊和大神のほうが先に播磨にいたように読めるが、後からやって来たアメノヒボコとの国占め争いは、相当激しいものとして描かれている。結局その争いをおさめたのは、山頂から黒葛（くろかずら）を投げるという一種の神占であったようで、これも古代におこなわれた「争いをおさめる方法」を象徴しているのかもしれない。

この二人の足跡は、摂・播国境に近い神戸市西区から、宍粟郡（しろうぐん）・神崎郡（かんざきぐん）を中心とした播磨、但馬（たじま）の出石郡（いずしぐん）、という広い範囲に散らばっていて、一度に巡るのは難しそうである。播磨、但馬と地域を決めて訪ねてみてはどうだろうか。



ともる灯



早朝の境内



北側の参道から



拝殿の鶴



東側の参道



古墳群の丘

アメノヒボコと出石神社



出石神社(鳥居)



出石神社(桜門)



出石神社(拝殿)

アメノヒボコは但馬国を得た後、豊岡（とよおか）周辺を中心とした円山川（まるやまがわ）流域を開拓したらしい。そして亡くなった後は、出石神社（いずしじんじゃ）の祭神として祭られることになった。

但馬一宮の出石神社は、出石町宮内にある。この場所は出石町の中心部よりも少し北にあたり、此隅山（このすみやま）からのびる尾根が出石川の右岸に至り、左岸にも山が迫って、懐のような地形になっている。神社はその奥の一段高い場所に建っている。

このあたりから下流は、たいへん洪水が多い場所である。2004年におきた豊岡市の大水害は記憶に新しいところだが、出石神社のあたりを発掘してみると、低湿地にたまる粘土や腐植物層と、洪水でたまった砂の層が厚く積み重なっている所が多い。

そんな場所であるから、古代、この地を開拓した人々は、非常な苦勞を強いられたことだろう。『出石神社由来記』には、アメノヒボコが「瀬戸の岩戸」を切り開いて、湖だった豊岡周辺を耕地にしたと記されているという。そのアメノヒボコは、神となって今も自分が開拓した平野をにらんでいるのだ。

この出石神社から1kmほど北へ行った所に、出石古代体験館がある。出石町内で発掘されたさまざまな資料が展示され、体験もできるから、古代史に関心がある人は訪ねてみるとよいだろう。



出石古代学習館

出石城



出石城(全景)

但馬の小京都とも呼ばれる出石には、ほかにも訪ねたい文化財が少なくない。町の南にある有子山（ありこやま）の裾には、出石城がある。江戸時代初期に築かれた城で、それ以前は背後の山頂に城があった。

城の下を流れる川にかかった橋を渡り、山腹に設けられた階段を登って本丸跡に立つと、出石の城下町と、その傍を流れる出石川までの素晴らしい景観を一望できる。左右からゆるやかにのびる尾根が、瓦屋根の並ぶ小さな町並みを箱庭のように縁取っている。



感応殿



本丸跡から



城下の町並み

御出石神社

御出石神社（みいずしじんじゃ）を訪ねたのは、もう夕暮れに近い時間だった。但東町（たんとうちょう）に近い桐野（きりの）の集落に、杉の巨樹に囲まれてひっそりとたたずむ宮がある。この神社には『古事記』の神話に語られた出石乙女が祭られている。兄弟二人の神から求婚されたという乙女は、アメノヒボコとも無縁ではないようだ。



御出石神社(本殿と拝殿)

うら若い乙女には、少し寂しすぎるような場所だけれど、通る人もいない参道から、夕空に浮かぶ影絵のような宮を眺めていると、はるかな時の流れがいっそう身に迫って感じられた。



御出石神社(参道)

藤無山



藤無山

播・但国境にある藤無山（ふじなしやま）は、標高1139.2m。今回はいくつかある登山路のうち、北の大屋町（おおやちょう）側を選択した。若杉峠（わかすとうげ）東の大屋スキー場奥から車で入れるため、登坂距離が短くてすむからである。林道（2006年の取材時は建設中）の途中で車を停めて、尾根筋までのスギやヒノキが植林された急坂を、息を切らせながら20分ほど登ることになる。

そこから先は、ゆるやかに起伏する尾根筋を歩く。左右は植林地がほとんどだが、所々にブナやミズナラが残る道である。植林された木はどれも、根元のあたりで大きく曲がっていて、積雪の厳しさがわかる。

尾根筋からの眺望は、思いのほか開けなかった。天候のせいもあったろうが、南側は北播磨の盆地が山間からかすかに望める程度である。北の但馬側も、蘇武岳（そふだけ）、妙見山（みょうけんさん）、鉢伏山（はちぶせやま）など「兵庫の屋根」と呼ばれる山々が連なり、伝説にあるように出石までを見通すことはできない。伝説の神様たちは、いったいどんな景色を見たのだろうか。



尾根からの眺望(播磨方面)



尾根からの眺望(但馬方面)

用語解説

【アメノヒボコ】あめのひぼこ

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコノミコトともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加留比売（あかるひめ）を追って日本に来たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

【出石神社】いずしじんじゃ

豊岡市出石町宮内に所在する式内社（しきないしゃ）。但馬国の一宮（いちのみや）。アメノヒボコを祭神とし、アメノヒボコが新羅よりもたらした八種神宝（やくさのかんだから）を祭る。

【伊和大神】いわのおおかみ

宍粟市一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おこなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名持御魂神（おこなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらしこおのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、「兵庫の貴重な景観」Bランクに選定されている。

【伊和氏】いわし

『播磨国風土記』に、「伊和君」として記される古代豪族。『播磨国風土記』によれば、もと宍粟郡の石作里（いしづくりのさと）を本拠とし、飾磨郡の伊和里（いわのさと）に移り住んだとされる。伊和大神を奉じ、これを祭る伊和神社は、宍粟市一宮町に所在する。

【瀬戸の岩戸の開削】せとのいわとのかいさく

『出石神社由来記』による伝承。かつて入江、あるいは潟のような状況であった豊岡平野を、瀬戸の岩戸（現在の豊岡市来日岳（くるひだけ）付近とされる）を開削することによって排水し、耕地として開拓したという内容である。

【出石城】いずしじょう

豊岡市出石町に所在する城跡。天正2(1574)年に、山名氏によって有子山山頂に築かれた有子山城を端緒とする。天正8(1580)年に、有子山城は羽柴秀吉の但馬攻撃により落城した。慶長8(1604)年、小出吉英により有子山山麓に築かれた平山城が、現在の出石城跡である。本丸と二の丸を山腹に、三の丸を平地に配する梯郭式(ていかくしき)の城で、山頂の城へとつながる。

小出氏の後は、松平氏、仙石氏と続き幕末に至った。明治元年にすべての建物が取り壊された。

【御出石神社】みいずしじんじゃ

豊岡市出石町桐野にある式内社(しきないしゃ)。アメノヒボコと出石乙女が祭られている。出石乙女は『古事記』において、八種神宝(やくさのかんだから、アメノヒボコが新羅からもたらした宝物)を神とした「伊豆志之八前大神」の娘とされる。多くの神に求婚されたがこれを退けて、春山之霞壮士(はるやまのかすみおとこ)と結ばれるという伝説が語られている。

【藤無山】ふじなしやま

宍粟市と養父市の境界をなす山地にある山。標高は1139.2m。若杉峠の東にある、大屋スキー場から尾根筋に登るルートが比較的平易だが、ルートによっては難路も多い、熟達者向けの山である。尾根筋付近は植林地となっている。

【伊和中山古墳群】いわなかやまこふんぐん

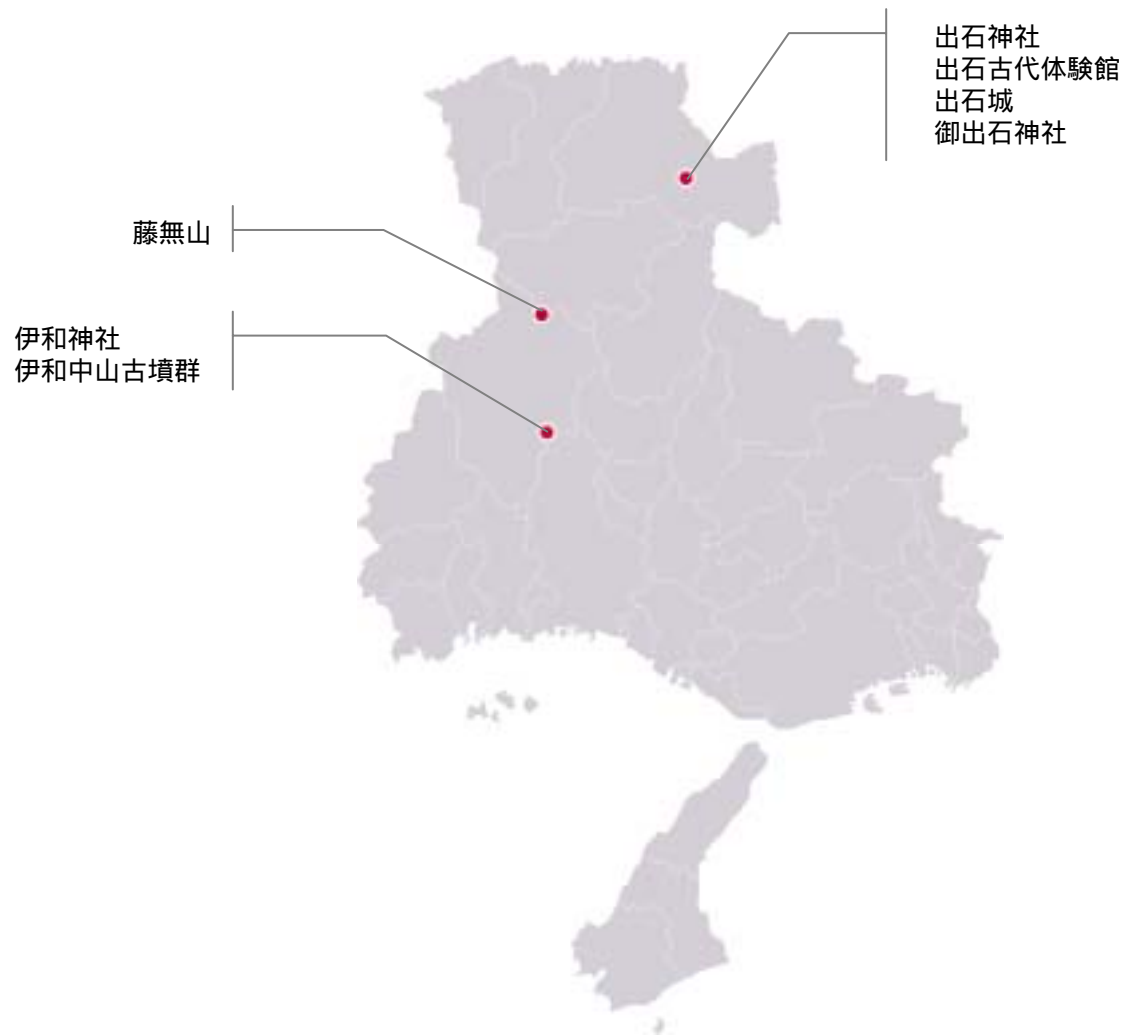
宍粟市一宮町伊和に所在する、古墳時代前期～後期の古墳群。伊和神社の南東にある丘陵上に、前方後円墳1基を含む16基の古墳が確認されており、うち1号墳と2号墳の発掘調査がおこなわれている。

古墳群中最大の1号墳は、全長62mをはかる前方後円墳で、竪穴式(たてあなしき)石室内に全長5mの木棺を埋葬していた。副葬品には国産の方格(ほうかく)T字鏡、環頭大刀(かんとうたち)、剣、鉄鏃(てつぞく)、鉄槍(てつそう)、鉄斧(てつぷ)、玉類がある。揖保川上流域における古墳時代史を研究する上で重要な古墳群である。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	出石町史第三巻(資料編)	1987	出石町史編集委員会	出石町
	新訂増補国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美	吉川弘文館
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史 考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	風土記の考古学2 播磨国風土記の巻	1994	櫃本誠一編	同成社
その他	伊和神社御由緒略記 参拝者用資料		伊和神社	伊和神社

所在地リスト



出石神社	兵庫県豊岡市出石町宮内99
出石古代体験館	豊岡市出石町袴狭380-1
出石城	兵庫県豊岡市出石町内町
御出石神社	豊岡市出石町桐野986
藤無山	養父市大屋町と宍粟市一宮町境界
伊和神社	宍粟市一宮町須行名(すぎょうめ)
伊和中山古墳群	宍粟市一宮町伊和上へ中山・中野

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日